

## 「再度、死を予告する」

2015年07月16日

ルカによる福音書9章43b節～45節。イエスがなさったすべてのことに、皆が驚いていると、イエスは弟子たちに言われた。「この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている。」弟子たちはその言葉が分からなかった。彼らには理解できないように隠されていたのである。彼らは、怖くてその言葉について尋ねられなかった。

主イエスは慰めと励ましに満ちた言葉と人間回復をもたらした力強い奇跡により民衆から圧倒的な支持と賛辞を得ていた。生きることを喜び合う真実があったからである。民衆は主イエスを慕い、群がる状況が続いた。そのような中で、弟子たちに「この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている」と語っている。民衆の間で喜びが満ち溢れている時、「よく耳に入れておきなさい」と特別な注意を喚起し、人々の手に引き渡されると死の予告をしている。

「人の子」という言葉は新約聖書独特のものである。詩編などで「人の子」と言った場合、当然「人間」を指している。新約聖書の「人の子」はダニエル書7章13節、14節から引用されている。「夜の幻をなお見ていると、／見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り／『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み 権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない。」黙示文学的な表現であるが、「人の子」は明らかに「メシア」を意味している。「人の子」のような者が天の雲に乗り、「日の老いたる者・神」の前に進み出て、権威、威光、王権を授かり、世界の民は「人の子」に仕え、「人の子」の支配は永遠に続き、その統治は滅びることがないと、栄光に満ちたメシア像を描いている。

新約聖書において、主イエスはダニエルが著した「人の子・メシア」であると捉えた。ダニエル書の「人の子」は栄光のメシアであるが、主イエスは苦難を負う「人の子・メシア」として受け止めたのである。今、主イエスは「人の子は人々の手に引き渡されようとしている」と、苦難を負い、死にゆく者であると語った。

弟子たちは主イエスの言葉を理解することができなかった。彼らは怖くて、そのことを尋ねることができなかった。ルカ福音書は「彼らには理解できないように隠されていた」と注解している。ここに、十字架の福音の核心、真髄がある。人間が求める救いは、誰もが力強さ、豊かさ、見栄えの良さをもって与えられると期待するであろう。ダニエル書に著された「人の子」の栄光が救いをもたらすと考える。しかし、主イエスがもたらした救いは、栄光とは真逆な十字架の死という無残な死を通して実現したのである。人の知恵には思い及ばぬことである。弟子たちは主イエスの力強い言葉と奇跡を見聞きしてきた。彼らも苦しみ、死にゆく主イエスを想像できなかったのは当然であろう。

「人の子」イエスは権力者たちになぶり者にされ、侮辱され、十字架で殺された。この主イエスの苦難と死に、人間の罪の赦し、神と共にある和解（インマヌエル）の救いが実現した。福音書が告げる神は栄光の神ではなく、人間の罪を悲しみ「人の子」に犠牲を負わせる神である。人を救う愛は、苦難を伴う犠牲において現される真理であるからである。この逆説は、信仰においてのみ承服できることで、また、この逆説を生きるところに復活の命に与れると約束している。